

長の訓辞を聴講し、基礎訓練を受けたのち、満州大陸の饒河に着いた。広漠たる大平原に驚喜しながら、作業、訓練、学科など、厳しさの中に同志愛の深さに感動しながらの日常であった。義勇隊の訓練を完了後、現地調査した結果、湯原県長明地区に入植となった。

昭和十五年五月、井上氏は警備兵器弾薬の責任者でありながら、農産加工と製材の両主任兼務の大わらわの多忙をきわめていた。昭和二十年五月、現地召集を受け、八面通の工兵第八三部隊に入隊となる。八月には本溪湖の部隊に転属となり陸軍一等兵に進級して欣喜雀躍した。八月十五日終戦となり部隊は解散となった。

井上氏はソ連軍は必ず日本軍人を捕虜にするとの予見から、同志六人とともに脱走を図り新京に入った。そこで晨明開拓団の人たちと涙の再会をした。樺陽の団員を含めて八十四人、生死をともに共同生活をして、井上氏の才覚で一人の凍傷もなく越冬できた。新京市千早町菊水第六班第七組長、八十数人の責任者として、昭和二十一年六月引揚げ準備を整え、帰国し、感謝さ

れ喜ばれた。

故郷に着いた井上氏は、自分一人で山を調査して開墾申請を出し、バラックの家を建てて荒地を開墾し、水田を作り畑から野菜を採り、親子三人でランプ生活を送り、正に臥薪嘗胆が続いたが、努力精進の結果、引き揚げてから五十年目で、土地を得て住宅を建て、水田、畑地に、牛を飼育し、野菜の売上げだけでも年間八十万円を得る農家となった。

満州で亡くなった方々への供養にと、寺の禪師の弟子となって、お務めしている井上隆氏である。

(引揚げ者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 妻と拓友の冥福を祈る

山形県 佐藤 末 児

私は明治生まれの八十六歳になり、心身共に老化を自覚するこのごろです。小学校を出てから、根っから

の百姓、戦前戦後を通しての開拓一途の人生でした。

小学校当時の大正十年ごろは第一次世界大戦も終わり、そのころからすべて世の中が変わったように思われます。例えば、第一に私の生まれた山間の農村に電灯がついたり、ゴム靴が履けたのを、今も思い出すが、電球はキューピーの頭のような形をした豆電球でした。それまでは石油ランプを使っておりましたので、学校から帰るとランプの掃除をし石油を入れておくことが毎日の日課でした。初めてゴム靴を買って嬉しかったこと、それまでは履物は藁草履か下駄で通った時代でした。また、そのころの田んぼは夏冬通して一年中水を入れておりましたので、春になり田んぼの雪が消えると、タニシ、メダカ、ドジョウコ、フナッコなどたくさんおり、学校から帰ると友達と一緒にタニシやフナッコ取り、夏には川にカチカとり、水泳ぎ、秋には栗拾い、アケビ、山ぶどう採りと楽しく過ごしました。

昭和七年、国策移民の第一陣として渡満した。東京出発は十月三日、途中、四日は伊勢神宮参拝、五日、神戸港から大阪商船バイカル丸に乗船、八日、大連港

上陸、奉天に向かう。奉天北大宮日本国民高等学校へ二泊、ここで既に訓練を受けていた七十人（内十人先発）とともに、十日夜奉天より出発、十一日ハルビン着、十三日、松花江下航、十四日、午後五時佳木斯到着、同夜、佳木斯は匪襲激戦のため船内一泊、十五日、午前八時上陸、佳木斯に第一歩を記した。佳木斯には松江の歩兵六十三連隊の二個中隊が守備についていたが、私たちが上陸後は開拓団と共同で守備。六十三連隊の現役兵は匪賊の討伐に出て、街の守備の方は主として私たち開拓団で受け持ちながら、現地入植後の農具の調整をしつつ昭和八年を迎えた。

二月十一日の紀元節に先遣隊百五十人は、佳木斯東方約六十キロの永豊鎮に入植。直ちに付近に集結する匪賊と交戦、これを撃退し、その戦鬪で福島小隊の渡部熊治君戦死す。これが私たち移民最初の戦死者となる。四月一日には佳木斯に残留していた本隊も、永豊鎮に入植し入植完了となる。十一月から二月中旬まで深さ二メートルも凍った土も、春の暖かさで一日一日と溶け始め、佳木斯滞在中に準備していた農機具

(満州在来式リージャン)の試運転を始め農耕班、加工班(味噌、しょう油)、建築班、蔬菜班、水田班、伐採班、運材班、製材班、石工班といろいろ手分けし、各小隊から二、三人ずつ出て班を作り、作業にとりかかることになる。私は運材班になる。いずれにしても十年ごろまでに最低生活ができるように進めなければ、内地からの家族召致ができないので、みんな真剣になる。早く花嫁の顔を見たいのである。

運材班には、宮城の武藤春雄、大泉光重郎、早坂辰治、新潟の吉原浅治、群馬の白石伊八、原田時次郎、山形の庄司晴吉、栃木の川島辰雄君がいた。老平崗の現住民の山小屋の廃屋を修理し、十数人で一年半あまり生活を共にした。屋根が低いので着替えるとき、頭がつかえるので苦労した。早坂君と川島君のほかはみんな二十四、五歳なので、元気で働いたことは今でも忘れることはできない。みんな剛力ぞろいで、六メートルもあるドロの木の梁を二人で、二・三百メートルも運び出し、だれ一人として弱音を吐く人がなく、頑張りました。野鹿、兎、小川には小魚、山には山菜・

山ぶどうも多く、食卓をにぎわせたそのころ、内地から視察団が訪れたので、きのこ鍋と肉の煮込みをもちそうしたら、北満に来てこんな食事をいただくとは思わなかったと大喜び。おみやげに「平たけや 山々伯の馳走ぶり」と一句を残して帰られたこともあった。

ある時、本部に連絡に行つて帰ってきたが、あいにく御飯がなかったので、小屋の軒下で飯ごうで御飯を炊いていたところ、小屋の屋根に飛び火し、消す水が近くになく、軒下で作っていた大がめのぶどう液で消し止めたこともあった。こうした共同作業・共同生活を一年余り続けたが、その間、幸いにも私たちの伐採、運材班には匪賊の出現もなく、作業事故も出さずに小隊復帰することができた。

小隊では各小隊ごと分散入植し、共同家屋をはじめ、続いて一棟四家族入居の住宅建設を進め、徐々にではあるが、花嫁を迎えることができるようになった。

昭和十年ごろになると各小隊でも個人住宅も出来上り、家族や花嫁を迎えることになり、小隊から代表して出身の方へ迎えに出掛けることになった。私の小

隊では天童出身の菊地菊次郎君が山形の方へ花嫁を迎えに九口ごろ出発した。私も菊地君に託したので、十日に嫁を迎えることができた。全く見知らぬ人に写真一枚を頼りにきてくれたことに感謝しつつ、昭和二十七年七月までの十年間生活を共にした。その間、子供四人を得て我が人生一番幸せな時代であった。一方、昭和十二年に始まった支那事変もますます激しくなり、太平洋戦争へと発展し、我々開拓団にも十八年ころより、臨時召集が開始された。

また、このころになると治安も良くなり開拓事業の方も予想以上に進み、北海道から営農指導員を招き、向陽山には指導農場を設け、プラウ農法を導入、実績は見るべきものがあつた。土地も一戸当り二十町歩の配分を終了。人口も一戸当り子供三人から四人をもうけ、家族合計六人近くまでになり、小学校入学児童も昭和十八年ころから一年に百人余りを数えるほどになる。佳木斯には医科大学も創設され、前途はますます期待されるようになっていた。

昭和二十年七月三日、大動員が始まった。当時、私

たち山形部落は三十二戸であつた。そこに安部二男、船山源三、迎田周治と私と四人で、私の開拓団全体四十数人ほどであつたようだ。これが根こそぎ動員の始まりで、私は岩手の菊地喜惣吉君と羽陽部落の江口富七君と三人、同部隊に入隊することになり四日に出発した。入隊部隊は安東の部隊で入隊した翌日、朝鮮大邱<sup>まきゅう</sup>の部隊へ菊地、江口君の三人とも一緒に転属になり、行動を共にすることができた。戦争もますます激しさを増し、六月には沖繩も陥落といよいよ本土決戦とのうわさも耳にするうち、八月九日にはソ連軍の満州侵入とのことで、入植地に残してきた妻子のことを考えると、一日も早く満州に救出に思っているうち、十五日の終戦を迎え敗戦と聞き残念無念ただ茫然とするのみ。直ちに部隊本部へ行き事情を話し、一日も早く召集解除を申し出たのであるが、中央から指示が出ないので許可ができないとのこと、しかし、私たちのように家族を満州に残してきた者は気がでない。毎日のように部隊本部の方へ催促し、八月三十日米と乾パン三食分、襦袢、袴下二着、俸給二十円ぐらいを支給

され部隊をあとにし大邱駅に向かう。大邱駅で駅長に頼み、満州に家族を残して入隊後行動を共にした百五十数人は駅長の計らいで、客車二両を増結してもらい、全員乗車し京城に向かう。

京城以北は間もなく南北朝鮮のソ連とアメリカの占領国境線の三十八度線で、列車の運行は京城が終点である。下車して直ちに総督府に向向、事情を話し満州国内の状況、ことに北滿の入植地付近について訪ねる。しかし総督府として満州国内の事情は全く判明しないので、自分の間宿舎を割り当て朝夕、給食を手配するから曹溪国民学校に寄宿し、しばらく状況をみてはとのこと。それから数日、江口、菊地君の三人で毎日京城駅に行き、満州方面から京城にくる人の話をと聞き、出掛けるのが口課となった。と言うのもその頃、京城駅では駅の待合室の周囲に掲示板を特設、満州や北鮮方面から京城にこられた人の伝言に供していた。私たちも毎日総督府（終戦後総督府は世話部と名稱変更になる）に出掛けるのであるが、一向に状況不明なので、丸腰でソ連兵の境界線を突破すること危険であり、ま

た、ソ連兵でも女、子供を皆殺しはしらないと思われるので、一応郷里に帰って待つように、そのようにすれば居住地まで無料乗車券を発給すること。列車の指定により一応郷里に帰ることに決定、三人共九月十日、京城発列車にて釜山港に向かい夕方釜山着。一泊し十一日釜山港を出発。夕刻、山口県仙崎港に上陸。

部隊を出てから十日余り京城滞在中は朝夕の給食にあずかったとは言え、大豆と米半々の卵大のお握りで我慢して、ようやく内地への第一歩、いよいよ郷里近しいの感。早速旅館を探したが見当たらず、漁師の家に一泊お願いし、部隊を出るとき配給を受けた米一升ぐらいあったであろうか、半量ぐらい一人で出し炊飯をお願いした。漁師のお宅では大変御親切に自家用にとって置いた魚を煮て御馳走になり、おいしくいただいたことは、今でも思い出し感謝しております。

明るる十三日は山陰線で大阪に出て、大阪より青森行きの列車で帰ることにし、漁師の宅に礼をして仙崎の地を離れ大阪へと向かう。大阪より予定通りの列車羽越線坂町駅下車、米坂線にて米沢へ、米沢からかみ

のやま駅下車、温泉旅館へとここで一泊することにす  
る。何しろ終戦直後のこととて、列車の窓ガラスの破  
損も多く、また山陰線は特にトンネルも多く、顔もま  
っ黒になり、旅館に着いて、早速お湯に入り体を洗っ  
て持参している襦袢、袴下を着替えようと思つたら、  
旅館の受付けの女中さんは大の男三人揃つてまっ黒な  
顔で玄関に立つていて、余りに人相が悪いので驚き、  
今日はお客が満員で泊めることができかねると門前払  
いをする始末。話した事情は、「鬼のようでも心やさ  
しい桜の花よ、もし部屋がなければ、貴女の部屋でも  
よい。決して悪いことをするような男でない」と言っ  
たら女中さんは「主人に聞いてくるから」と奥へ引ッ  
込んで行つたが、直ぐ引き返してきて、「どうぞ」と言  
う。早速上がつて旅装を解き、仙崎の宿で半分出した  
米の残りを出して炊飯を頼み、乗車中に着てきた襦袢、  
袴下を洗い、部隊を出るときに支給され持参してきた  
物に着替え、夕食をとり、日本酒もないので葡萄酒に  
て乾杯し床についた。

再び内地開拓へ挑んで

九月十五日かみのやま温泉材木屋旅館にて朝食後、  
各々が再会を誓い菊地、江口の両君と別れをつけ、帰  
途、県庁に立ち寄り帰国の事情を報告の上、住所氏名  
を記載し、のち妻の生家に一泊し、状況を話したので  
ある。だれもが同様と思うが、妻の生家の家族（妻の  
母）の胸中を察すると胸が痛むのであつた。妻の家に  
一泊して十六日郷里の生家に着いても満州に残された  
妻子のことで自分としても心配でならない。時々、県  
庁に出向き事情を聞くのであるが、一向に満州の状況  
はつかめない。そうしているうちに、一枚の葉書が配  
達された。見ると同じ開拓団の北大宮部落の原田徳隆  
君からである。原田君も私と同じ日に召集令状を手  
にし、奉天の部隊に入隊したのであるが、聞いてみると  
奉天の部隊から間もなく朝鮮の済州島へ転属となり、  
そこで終戦を迎え除隊になつたとのこと。済州島にき  
ていたため、シベリア抑留を免がれたものの、満州に  
残された妻子のことは同じである。原田君も生家につ  
くと、すぐ県庁に出向き事情報告に行つたところ、私  
の氏名を見たのだと言う。そこで早速、会つて話をし

たいから至急出掛けてきてほしいとのこと、住所は山形市鉄鉋町原田與衛門宅と略図まで書きこんである。早速、私も翌日朝八時ごろの上りの列車で原田與衛門宅を訪れ、原田君と会い家族を交え一日中、満州に残した妻子のことや、今後、我々の進む道などを話し、その晩は原田君の生家にお世話になり、翌日、近いうちにまた会って今後のことを約束して別れを告げた。

その後、時々県庁に出向き、満州の状況を聞くとともに、いろいろ相談したが、県としても今後、海外から続々と引き揚げてくるであろう人々の受け入れ計画で大わらわであった。県では、「弥栄開拓の引揚者は経験技術とも第一人者であるから、今後、県内開拓の中心になってやってくれ」とのことであった。そうこうしているうちに、昭和二十年も過ぎ、二十一年を迎えたのであるが、なんとしても満州のことが気にかかった。私の場合は現地に残した家族は、妻三十三歳と八歳、六歳、五歳、二歳の子供の五人であった。うち何人が生きて帰ってこられるだろうかと考えながら、帰ってきてからでは遅い。何か今のうちにこれからや

ることに取り組まなければと、原田君と相談の上、県とも話し合い県内開拓地に入植することに決定した。

県内入植予定地を二人で踏査することにし、方々の予定地の土地を見たが、なかなか我々に適当な土地が見当たらない。それで最後に私の生家に一泊して山形に帰ることにした。私も原田君を真室川の駅まで見送ることにし、その途中の秋山の学童スキー場周辺の国有地が、駅から一キロぐらいの所で便利も悪くはないし、二十町歩ぐらい解放してもらえば、一人三町ずつ六人ぐらい入植できると思い、その交渉を私が一任された。私は直ちに国有地の所管である真室川営林署を訪れ署長に面談。事情を申し上げ理解を得たものの、私たちの希望する地区は地元部落に採草地として貸付地となっているので、その部落の承諾書が必要になる。これがまた大変なことなのである。というのは、当時、農村は購入肥料は入手困難の状態にあり、農家は採草地の草で堆肥を作り、それにより田畑を耕作していたのであるから、承諾書を得ることの困難なことは、署長自身も十分分かっていたのである。そこで署長の提

案が出たのである。その提案は、「営林署の苗畑があるが、飛行場設置のため縮小となる。一方、山林は戦時の木材不足のため乱伐となり、植林も労働力不足のためそのまま放置されている現状であり、直ちに植林急務となり、それにしたがって苗畑縮小復帰と三十町歩の拡大を決定してあるが、その開墾要員として働いて見たらどうか」とのこと、そこで翌日、早速山形の原田君と会い、いろいろ相談の上、開墾要員として働いてみることにした。

満州に残された家族を待ちつつ春も過ぎ、八月にもなったが、満州の状況はいぜん判明しない。ところが突然、八月二十七日に子供たちが新庄に着き、鉄砲町の三原様宅まで迎えにくるようになるとのこと、早速三原様宅行って十三カ月ぶりの対面であった。子供たちはやせこけてはいるが四人とも何んとか生きて帰ったのである。連れて帰ってきてくれたのは三原順さんであった。

三原順さんの話によると、私たちが召集を受けてから続々と召集がきて、男の人は部落に二人しか残らな

くなり、そうしているうちに、八月十二日本部からの通達あり、「身の回りの物を持って、直ちに八虎力駅はちこりき（八虎力駅は弥栄駅の次の駅で、羽陽、山形部落に近い駅）に集合」とのこと。みんな急いで準備し、使用していた馬夫に送られ駅に集合。そして乗車。佳木斯、綏化、ハルビン、新京にて越冬し、七月には錦県へと南下し、帰国に一步一步近づきつつあったようであったが、そのころ妻ムラは疲労と栄養失調のため、列車が錦州駅につくと直ぐ錦県の収容所に運ばれ、まもなく七月二十七日死亡したようである。子供たちはその後是一緒に行動してきた弥栄の方々、ことに山形部落のお世話になりながら、無事、八月十七日新庄に着いたのであった。その後、十一月に入って大連越冬組の北大宮部落の家族も山形に着いたのであるが、原田徳隆君の妻も山形に着いて間もなく、十日目に疲労と栄養失調のため、三人の子供を残して亡くなられた。こうしたことは原田君だけではない。私や原田君は南朝鮮区内に配属され帰国でき、所在が明確にできただけでも良いほうで、北朝鮮、満州地区内にいる人たちは

どんな困難に突き当たっていたかは判断できる。満州内でも弥栄は北満とはいえ、交通の便も良く、また役場の通達（指示）に速やかに対応し行動したことにより、犠牲者を最小限度にいとめてくれたことには、工藤村長をはじめ、その時の係の方々には深く敬意と感謝を申し上げる次第です。

こうした境遇は、私たち弥栄村は恵まれた方で奥地に入植した方々を思うとき、筆舌では表すことのできない思いがして胸にせまる。しかし、何が何んでも現実の問題として、生きて帰りついた子供（家族）を考えて自分で選んだ道を一步一步前進するのみと、それは私たち引揚者の共通の心境であった。今、考えると一日一人二合余りの配給で山野草を採り、配給米に糧として入れ、それを食べての開墾をよくやったと思いつ出す今日このごろである。

こうして私たち引揚者四人で三年かけて、営林署長との約束の約三十町歩の土地ほぼ完成し、十町歩は営林署の苗畑復帰、あとの二十町歩を私たちに所屬替え、こうして私たちは最寄りの開拓組合に編入、数年間畑

作経営に専念、昭和三十九年には泉田川上流にダムが完成、私たち開拓地も開田計画地域内に入り、各人三一四町歩を開田し、一步一步進となったのである。畑作でも共通して考えなければならないこととして、最初に雄の和牛一頭を買い入れ、畑の耕耘に使用すると共に堆肥をつくり、畑、田んぼに還元しつつ畑作を続け、昭和三十一年に乳牛一頭を入れ徐々に殖した。現在では牛、育成牛合わせて六十数頭、搾乳量日産八百キロを生産、水田五町五反、飼料畑四町五反（内借入地水田一町五反、畑一町五反）を耕作しておりますが、引揚げ当時には考えられなかった豊かな時代を迎えました。農産物は海外から入ってくるようになり、農村の若い世代も他産業より「労して功なし」とみるのか、後継者ばなれをみるようになりましたが、五十年前の引揚げ避難当時の食糧に事欠いたころを思い出し、食物を作ることは大切だと信じております。

引き揚げ途中、病気で弱った子供に「お母さん、白い御飯を食べたい」と言われてもあげられず、次の朝になつたら死んでいたと。帰ってきた人に聞きました。

人間としてこれ以上哀れることはないと思います。

私たち満州第一次開拓団員として、参加開拓十数年の短い年月ではあるが、国策移民として送り出され渡満後は、出発時の永井拓務大臣の訓辞を旨とし、五族協和の満州国家発展と日本の国策達成のため、原住民と友和を図り助けられたり助けたり、教えられたり教えたり大陸農法を体験しつつ、最初の四年間ぐらいい環境も異なり、匪賊の出没もあり中には匪弾に倒れ、あるいは病に襲われ、入植時には五百人の団員も三十数人に減少するという、いろいろ困難な時期も何とかきり抜け、昭和十年ごろには個人家族（満州式）も一応完成、内地からの家族召致いわゆる大陸の花嫁を迎える安定期に入り、匪賊の出没もなくなり安心して、各々の任務にはげむことができた。畑地や水田の開墾も順調に進み、農作物も大小豆、トウモロコシ、コウリヤン、粟などはもちろん蔬菜類も内地の東北地方でできるものは良く収穫できた。また冬期間土が二メートルも凍るためか農作物の病虫害も少なく、トマトのような野菜も一度も消毒なしに二段ぐらい一度に真っ

赤に熟れるのに驚いたほどであった。また、気候の方も九月上旬に初霜を見、無霜期間は百十日前後である。七、八月には気温もあがり雨期にはいるのであるが、農作物に被害や農作業に影響をあたえるほどは降らなかったようである。日本内地と異なって未墾の草原地帯も多く、将来の経営に希望をもって進むことができた。

また、私たちの任務は農業開拓移民としての入植で満州の現住民と共同生活にちかい生活で、自分はもちろん、子孫も満州国に骨を埋めるつもりで生活したので、現住民との問題もなく、たとえば小学校の低学年二、三年生が三四人で三キロ内外の道のりを小学校、又は分校まで通学していたが、一度も事故や事件に巻き込まれた話もなく、わずか数年で平穏な時代を迎えることができた。また組合直営の農産加工での味噌、醤油、搾油なども順調に進み、家畜も農耕用の牛馬をはじめ乳牛、綿羊、山羊、豚、鶏、蜜蜂などを取り入れ、中には杜氏の経験者もあり日本酒を、また近くの山にはたくさん山葡萄も生育しているので葡萄

酒を造り、一方、種畜場では場長の指導で「弥栄醜醜」と称するカルピスなども生産し、中には佳木斯の部隊へ軍納のほか、市販できるほどになり、あとは子供たちの成長を待つて理想的経営に夢と希望に向かつて進んでいた時代であった。

昭和五十五年には、引き揚げてから三十五年ぶりに慰霊の旅に出掛け、入植地にてひそかに慰霊祭を行つて参りました。

戦前戦後、自から選び与えられた開拓農耕一筋六十年、良き先生方とよき拓友それに健康に恵まれ、八十六歳の今日に至りました。その間、今日の豊かな時代をみることなくこの世を去つた妻のムラ、拓友の皆さんの冥福をお祈りいたします。

### 【執筆者の横顔】

佐藤末児氏は、明治四十二年四月に山形県真室川町生まれである。小学校も高等科も成績抜群で卒業して生家で農業に従事しながら、加藤寛治大高根農業講習所長を信奉していた。この当時から佐藤氏は大陸満州

開拓の有志勃勃であった。

昭和五年、近衛歩兵連隊に入営し翌六年除隊、七月三日、満州へ拓務省第一次試験移民団に参加し、四三二人と共に出発。

一同、明治神宮でお祓いをうけ、陸軍省、在郷軍人会から激励をうける。宮城前で遙拝し、永井拓務大臣から訓示をうけた。東京駅から送る者、送られる者異常な感激、伊勢神宮で斎戒し参拜、神戸の移民収容所講堂で橋本伝左エ門教授から訓話をうけた。神戸港から乗船し大連に上陸。新京、ハルビン経由で佳木斯移民団本部に入った。

入植以来一年余りの共同生活から小隊に分散し、更に一棟四家族入居の住宅建設を進め、昭和十年には花嫁と家族召致となった。

十八年、北海道から営農指導員を招き、ブラウ農法を導入して実質をあげ、昭和十八年には、たった一人の佐藤末児氏だったのに、妻と八歳、六歳、五歳、二歳の子供四人で六人の家族となつていた。

昭和二十年七月三日大動員がきて、佐藤氏は同部落

の菊地氏と江口氏の三人は朝鮮の大邱の部隊に入隊した。

翌、八月九日にソ連の満州攻略十五日敗戦を聞く。

大邱から京城に下車して総督府に向いて事情を話し、満州にいる家族探しのため満州行きを決意したが、三十八度線越境をソ連軍の許可をとるのは至難の業であり、これをあきらめて山形へ帰って家族を待つことに決める。

いかに軍隊の命とは言え、男一人引き揚げて家族を外地におき放ちての在郷は、何とむなしく胸の痛む思いであつたことか。

昭和二十一年八月二十七日、待つていた子供たちが四人ともやせこけ、それでも何とか生きて帰ってきたのである。話によると妻のムラさんは開拓部落から、弥栄駅、佳木斯、綏化、ハルビン、新京で越冬し、翌二十一年錦県へと南下、帰国に一步一步近づいていたのに疲労困憊と栄養失調のため、ついに七月二十七日死亡したとのことである。子供たちだけが原田さんたち山形部落のお世話で八月二十七日新庄に着いたので

ある。

四人の子供を生かそうとして病身でありながら尊い犠牲になった妻、ムラさんに対して佐藤末児氏は切齒扼腕して妻よ、ムラよ、見てくれと言わんばかりに、引き揚げ後、故郷にもどり、現在、飼料畑四町五反、成牛、育牛合わせて六十数頭、搾乳量、日産八百キロ生産、水田五町五反、畑一町五反を耕作している事実を、亡き妻に涙を流して報告する佐藤翁である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

## わたしの歩んだ道

栃木県 越井 静子

思い起こせば、昭和八年五月ごろのある日、地元の小学校の校長先生に呼ばれました。先生のお宅にお伺いいたしましたところ、「家内と二人で高田さん(旧姓)の希望を聞いて、良き御縁に向けてお仲人した